

一 次の文章を読み、後の問いに答えよ。(50点)

送電鉄塔などでは、こうした人工巢に効果があることがわかっています。送電鉄塔の上部にカラスが巢を作ると電気事故の危険性がありますが、中段から下であればまず安全です。そこで、そのあたりに人工巢を取り付け、カラスがそちらに巢を作るように⑦ユウドウするのです。人家の少ない④ノウコウ地の電柱でも、①同様の対策がとられていることもあります。コウノトリに対してはもっと待遇がよく、「人工巢塔」という、巢を作るため専用の塔が設置されています。

こういう取り組みを町中でも進めれば、カラスは巢を作ることができて、停電も起きずに万事解決、と思えますが、それなかなか難しいようです。

まず、どの電柱がカラスの好みの電柱なのかわからないため、人工巢をやみくもに設置するとコストがかかります。加えて、地域住民からの苦情も考えられます。電力会社が用意した人工巢でカラスが子育てをして、そのカラスが、地域住民の家庭菜園を荒らしたり、ごみを荒らしたりしたら、電力会社に②クジヨウがきます。そのため、町中で人工巢をどんどん設置しようという動きにはならないようです。

別の対策として、最近では、カラスの巢の状況をみて停電が起きそうになれば「巢立つまで待つてから撤去する」ということが、日本各地で行われているようです。実際、撤去しても、すぐに別の電柱に巢を作つてしまつてはカラスも人も苦勞するばかりですから、これはよい方法です。先ほど書いたように、電柱に巢を作るのはほとんどがハシボソガラスですから、巢の下を歩いている人が④オソワれる心配もほばありません。

またカササギについては、近年、その個体数が減少していることもあり、九州電力は、より積極的に守る方向で動いています。九州電力のサイトにある文章をそのまま引用しましょう。

「当社は、県鳥であり、国の天然記念物に指定されているカササギとの共存を図りつつ、カササギの巢による停電事故防止に努めています。巢作りの時季は、定期的に巡視を行い、停電事故につながる可能性のある巢の有無を確認します。金属製のハンガーや長い木の枝などの営巣材が電線に接触するなど、停電の可能性がある場合は、それらの営巣材を剪定し、極力、巢を残置するように努めています。毎年のようにカササギが巢作りする電柱には、営巣材が電線に接触しないように電柱と電線の間に通常よりも広い空間を作る対策や、電線などに特殊なカバーを取り付けるなどの対策を行っています」。

鳥の研究者としては、こうした電力会社の対応には感謝しかありません。ですから書くべきかどうか迷うのですが、それでも書くと、「②あまり鳥を甘やかさないほうがよい」かもしれません。

鳥というのは、親子間、同種の他個体間、さらには異種の他個体間で、さまざまなことを学びます。食べられるものは何か、どうやってたら効率よく餌を食べられるのか。他の巢の子育ての様子を見て、その年の餌の入手具合を予測して、産む卵の数を変えているのではないかと思われる例すらあります。

そんな風に周りの鳥から情報を得るのですから、当然、どこに巢を作るかも学んでいるはずです。前章でカササギが数十年で急に電柱に巢を作るようになった例を示しましたが、これも「それぞれのカササギが試行④サクゴした結果」と考えるよりも「他の個体を真似た結果」と考えるほうが、説明が

つきやすいのです。

そのため電力会社が、電柱への巣作りを見守ってしまうと、今まで電柱で営巣していなかった鳥も「そっか、電柱で子育てをしても大丈夫なんだ」と認識してしまうかもしれないのです。また電柱で巣立った鳥は、大人になるとやはり電柱で巣を作る傾向があるかもしれません。つまり、見守りの姿勢は電柱への営巣を助長してしまう可能性があるのです。

三上修(二〇二〇)『電柱鳥類学―スズメはどこに止まってる?』 岩波書店

(一) ㊦㊧のカタカナを漢字に直せ。

(二) 傍線部(1)の内容及び傍線部(1)とは別の対策について、いずれもカラスに限定し、本文に即して八〇字以内で答えよ。

(三) 傍線部(2)の理由を本文に即して八〇字以内で答えよ。

二 次の文章を読み、後の問いに答えよ。(50点)

ものを移すとき、いちばんやさしいのは、物理的移動である。これは任意のときに任意の場所へ移すことができる。移されたものは、前の場所と新しい場所の差などからほとんど影響をうけることはない。ヨーロッパから運ばれてきた机は、着いた㊨シユンカンから机としての機能を発揮する。

明治以来、われわれの国はおびただしい品物を外国から輸入した。いわゆる舶来品である。品物は、すこしも加工を加えないでも移動ができるので手間がかからなくてよい。そのやり方をそのまま精神的文化財の輸入にあたっても適用してきたのではあるまいか。外国で流行していたり、重視されていたりする学問や芸術があると、さっそく、そっくりそのままもつてくる。

何しろこれまで外国の学問をしてきたのは選りすぐりの秀才たちであるから、学問、芸術についてのこういう物理的移動が、一応はできたように思われるのである。そして、人々は次第に、文化が無生物ではなくて、生命をもった有機体であることを忘れた。品物を輸入すると同じように学問や思想を輸入できることが学者の資格とされるようになったのである。

文化のような生き物を移すのは、植物的移動、すなわち、移植でなければならない。どんな小さな木でも、移すとなれば、品物を動かすように簡単にはゆかない。

まず、移植できるかどうかをあらかじめ考える必要があるのである。どんなにきれいな花が咲いているからといって、高山植物を自分の庭先に移植することはできない。受け入れ側の風土、地味、気候などがその植物に適合しているときにはじめて、移植が現実の問題になるのである。何でもすぐれたものなら、どこへでも移すことができるように考える国際主義がいつもわれわれの頭の中にあるが、根づかぬものはいくらでもある。

(中略)

外国人がどんなに早業で輸入してみても、本国とのあいだの時差はまぬがれない。やっと移植が終ったころには、もう花の時はすぎてしまうのが普通である。移植をする人間は時流に超然とした田夫野人でなくてはならない。根気がある。

のんきな移植者にとつての一番よい目安は、花の散つた時である。人々は、花の散つた木を次第に忘れてゆく。そういう木を大事に守っていることに⑥ショウソウを感じるような人は、はじめから移植などに手を出すべきではない。性に合わないのである。

花が散つて、また次の花時^{はなとき}がめぐつてくるまでに、十年、二十年あるいは三十年を必要とするかもしれない。それまではじたばたしない、ゆっくり待つことである。急ぐと、木そのものの生命を殺してしまいかねない。ことに移植した直後しばらくは、見たところ枯れたも同然であるが、その間が木にとつて新しい土地の中へ根をおろしてゆく大事な時なのである。

外国の文化をとり入れようとするとき、なるべく、もとのままを、というのは人情であるが、これも移植の立場からすると、反省の◎ヨチがある。移植ということは植物にとつておそろしい危険をともなう試練である。すこしでも余分なものはとりのぞいて負担を軽くしなくてはならない。移植が枝を落して移すのはそのためである。あるがままのものをそっくり移すというのは、ことばの上だけならばともかく、実際には不可能である。物理的移動と移植のちがいが、そこにあるといつてよい。

そんなにしてまで移植する必要が果してあるのか、ということになるのだが、よそに咲いている花が美しいと、④リクツぬきでほしくなる。どうしてもうちで咲かせたいと思う。そこでいちばん手っ取り早いのは一枝手折^{たお}つてきて◎カビンにいけておく手である。これは、なるほど一時は美しいが、こういう花のいのちが短いのは当然である。われわれのもっとも多くお目にかかる外国文化の紹介は、この手の生け花的なもので、三日見ぬ間の桜のように、移ろいやすい。いつも応接に忙しいが、そこから別の新しい花が咲くということはなかなかおこりにくい。

同じ一枝も生け花にしないで、さし木にするという方法もある。時と、ものによつては、さし木の根づくこともないではないが、これは当面の花を賞^あでるといふわけにはゆかないだろう。やはり花をつけた枝をさし木することはしないからである。

(A)どうしても、もつとも正統的なのは移植ということになる。

おもしろいことに、植物には、移植したほうがりっぱな花や実をつける種類のものがあるらしい。ちよつと頭に浮ぶものでも、稲などは移植に適したものの一つである。田植という移動が有効である。逆に動かしてはだめなものもある。

文化においても、同じことが言われはしないだろうか。外国へ移されたほうがかえつておもしろいというものと、外国人には猫に小判でさっぱり理解されないものがあるようだ。そこを心得ていて、外国のものを紹介したり移入したりするようにしたいものである。

外山滋比古(二〇二〇)『日本語の個性』中央公論新社

(一) ①～⑤のカタカナを漢字に直せ。

(二) 本文において、文化の取り入れ方として示されている語句を四つ答え、それぞれが意味する文化の取り入れ方を本文に即して二〇字以上四〇字以内で説明せよ。

(三) 傍線部(A)「どうしても、もつとも正統的なのは移植ということになる」のはなぜか。その理由を文に即して一五〇字以内で説明せよ。